

ありきたりといえ、ありきたりな出会いだった。ありえるかと問われれば、数年前まではありえないと笑ったはずだ。

それは、茂みの中から襲ってきた。

空は灰色でうす暗かった。周囲は木が無秩序に生えていた。雑草が生い茂り、所によっては腰ほどの高さまで伸びている草もあった。

僕は空の様子を伺いながら走っていた。背中にはスカスカのリュックサック、左手には木の棒。吐く息は白くなっていた。

道の状態が悪く、あまりスピードが出せない。

徐々に暗くなっていく空と厚くなっていく雲に不安を覚えながら、道なき下り道を進んでいた。

*

いつから僕は獲物として認識されていたのだろう。弱肉強食に戻ったこの時代に、山へ入れば、そうなるのは当然の結果である。

後ろから草の揺れる音がして、振り返ったときには黒い影が迫っていた。四肢と頭がある。大きく開かれる口の中には無数の牙が見えた。

それは飢えた野犬だ。そう気づいた頃には左腕に走る激痛で、一瞬思考は停止した。刺すような痛みがいくつもあった。あまりの痛みにも声も出なかった。

天地がひっくり返ったかのような錯覚。視界には汚れた白い毛並みの犬の頭と広がる木の枝と、その遥か上に広がる空。

すすり泣くような声と猛獣の唸り声が耳の中で混ざる。

無数にあったはずの痛みが収束し、一つの大きな痛みにまとまっていくような感覚がしていた。喰われる。僕は狩られる側にいる。

それだけがはつきりと頭に浮かんだ。動く右腕で必死になって殴ろうとしていた。しかし、力がうまく入らない。

左腕が痛みを感じなくなった。痛覚もマヒしたのか。

そう思った時、鼻にツンとした、刺さるような臭いを感じた。それから少し遅れて左腕の傷に刺さるのとは全く異なる、染みるような痛みがした。

突如、視界に白衣が現れた。厚手のブーツに迷彩柄のズボンとタンクトップ。その上から白衣を軽く羽織っていた。

「そんな軽装で山に入るなんて昔でもありえないよ。血が出る割に傷口は浅いね」

白衣の人は屈んで僕の腕を覗き込んだ。とてもきれいな女性だな。それが第一印象だった。良く整った顔立ちで、化粧の感じは全くない。当然であるが。

日焼け止めなどしている余裕はないはずだが、小麦色に近い綺麗な肌をしていた。

「少し染みるよ」

白い何かが左腕に当てられ、再び染みる痛みが襲ってきた。僕は苦痛に声を上げた気がする。

ここで、僕の記憶は途切れた。

*

この世界に、文明は残っていない。人間が生きるにはあまりにも厳しい環境だ。それは全て自然の厳しさとは言い切れない。そんな中での長い冬は、止めに等しかった。

長い冬が明けて、人を見ることが少なくなった。

仰向けに倒れた僕の上で、野犬が遠吠えをした。良く響く高い音は、辺り一面にこだまして、仲間を呼び寄せる。

招かれたその仲間達は唸り声を上げて涎を垂らし、僕を見つめた。一匹が三匹に、三匹が五匹に増え、一斉に群がって喰らい始めた。

噛みつき、引きちぎり、視界には赤く汚れた白い毛のみだ。

痛みがない。そう思った時には、群がる野犬の姿は消えていた。深い緑の生地ですでに低い天井から吊るされた、わずかに揺れるランタンが目に入った。壁も屋根も深緑の生地ですでにそれを支える様に鉄の柱が傘のように広がっていた。

気が付いたら、僕はテントの中にいた。

「夢……」

テントの首と目線だけを動かしてテントの中を見回すと、白衣の女性の姿があった。

状況を把握するため、起き上ると左腕が激しく痛んだ。僕の左腕には包帯が厚く巻かれていた。幾重にも巻かれた包帯は血が染みて赤くなっていた。

「かなりうなされてたよ」

先程の女性の声であった。僕のすぐ後ろから聞こえた。

指摘されて初めて、息が荒れていたことに気づいた。心臓も激しく脈打っていた。

振り返ると、白衣の女性が座っていた。

「ここはどこですか？」

これは尋ねるべきであろう。

折り畳まれた多機能ナイフを掌の上で転がしながら、淡々と答えた。その態度は堂々としてい、というような印象を与えてくる。

「私達の生活しているテントだよ。安心して」

そのとき、肩に力が入っていた事に気づいた。

「大丈夫、私達は強奪とかしないから」

冗談を飛ばしながら、彼女は僕のすぐ手前まで来た。そのまま、僕の両手の掌を両頬に当て、僕の顔をじっと見ていた。彼女の顔が、僕の顔から数センチの所まで来ていた。

心臓の鼓動が速いのはこの状況のせいか、先程の悪夢のせいかわからなかった。

「な、何ですか？」

戸惑いを隠せずに尋ねた。

彼女はそれを無視して、親指で目の近くを触っていた。一つ一つチェックする様に、僕の顔を様々な角度に傾けた。

首にまで手を這わせてから、離れた。

「口あけて」

病院の診察を思い出した。

言われる儘口を開けると、懐中電灯で口の中を照らした。

白衣のポケットから、聴診器を出し、僕の胸と背中当てた。

「とりあえず今は異常なしかな。しばらく風邪みたいな症状や痙攣には気をつけて。犬に噛まれたみたいだから狂犬病を疑わないといけないから。潜伏期間は一ヶ月から数ヶ月」

「狂犬病？」

「でも噛みついてた方には首輪が付いてたから安心して」

驚き、戸惑う僕に彼女は次々と話してくる。

「あの、お名前は？」

彼女の話を遮って問いかけると、彼女は困ったような顔をした。手の上で転がしていた多機能ナイフを落とした。

「私？」

ただ、名前ぐらいは聞いておくべきであろう、と思つて質問をしただけであつた。数秒の間が開いた。沈黙の中、僕は何を間違えたのか考えた。

「吉野蘇命」

彼女はそう、小さく呟いた。わずかに視線をそらしながら。

春の景色が桃色に染まる様子がイメージされた。

「桜の品種みたいですね」

それゆえに、名前を言いたくなかつたのであろう。学校などで、からかわれそうな名前である。

「それを言うな！」

顔を赤くしていた。畳んだままの多機能ナイフを投げつけられた。真っ直ぐ飛んできて、僕の頭に直撃した。刃が刺さったりはしていないが、非常に痛い。

「それにしても変わった名前ですよ」

多機能ナイフを軽く投げ返した。

「父親が将来医者にしたいとかでつけたんだつてさ。蘇る命で蘇命。変わった名前の上に、アレだから小学生の時はいじめられたよ」

「やっぱりですか……」

「父親の願ひ通り医者にはなつたものの、失われた命は蘇らすことはできなかったよ。当たり前だけど」

ランタンの場所と向いた方向のせいと、蘇命さんの顔が陰になった。

唐突に、扉の役割をしていた布を大きくめくられた。それと同時に冷たい空気がテントの中へと押し寄せてきた。布は厚手のものが二枚重ねになっていた。

布をめくり、覗き込んできたのは一人の青年だつた。背が高く、肩幅も広めだつた。十代後半程に見える。やや少年の幼さを残しているが、大人の顔つきに近づきつつあつた。

「サクラ先生、夕食できましたよ」

彼は中へと入ってきて、僕を物珍しそうな目で見た。

「あんたが野犬に襲われたドジか。俺は矢部大樹っていうんだ。よろしく」

大樹と名乗つた青年が右手を開いて差し出してきた。恐らく、握手を求めているのだろう。左手を出そうとしたが、動かなかつた。包帯で固定されていた。

「悪い、その腕じゃ握手できないな」

それを見てか、蘇命さんが立ち上がった。

「自己紹介も必要だし、夕食を食べながら話そうか」

そう言っただけで入口を開けたまま、テントから出て行った。

夕食は日が沈みかかった夕方、川辺で食べるようだ。

すぐ近くに橋の見える河原だった。草が生え、葉を落とした木々か並んでいた。幅の広い、しかし流れは緩やかな川があった。流れる水が沈みかけの夕陽を反射していた。

川の近くには雑草が伸び放題の畑。背の高いものでは腰ほどの高さのものがある程だ。耕作放棄地ではない。山と森が畑のすぐ近くまで迫っていた。

対岸はあえて注視しない。廃墟の群れ、灰色の荒野。街として機能しているはずもない。断言できる、この川の向こうにも文明は残っていない。

人がいたとしても、その燦々たる様子は見たくない。目を背けたくなるようなことしかない。これまで見てきた所はそういった有り様だった。恐らく、これからも。

視線を机へと戻した。

プラスチックでできた折り畳み式のテーブルを三つ広げ、同じ質感の折り畳み椅子を並べていた。テーブルの上には山菜らしき物のサラダと肉らしきもの、水に浸かった米が並んでいた。褪せた茶色の折り畳み式テーブルに色とりどりのものが並んでいた。

贅沢な食事だ。そう思った。

これが十年前なら、間違いなく激怒して文句を言ったはずである。それこそ、ちゃぶ台返しを披露することになっていたはずだ。今では食事ができるだけでありがたい。

上座に蘇命さんが座り、地図を新聞のように広げて読んでいた。かつて、どここの家庭でもこのような朝食風景はあったと思われる。

大樹と呼ばれていた青年が、フォークとスプーンを並べた。彼はこちらを見ると、大きな声で誇らしげな表情をして宣言した。

「生き残り発見したので、今日は備蓄食材大処分祭りです！」

「明日からどうするんだ！」

つい口を突いて出てしまった。言ったのは僕だった。

備蓄食材が底を尽くぐらいの時期だ。救援物資が届く訳でもない。長い冬が明けたとはいえ、食糧の調達も難しい。食料の問題は死活問題だ。

「冗談に決まってるだろ」

彼は反り返る程笑っていた。冗談ではすまされないジョークに、蘇命さんも笑っていた。

僕の隣に大樹、斜め向かいに蘇命さん、正面には少女が座っていた。正面の少女が僕を見て、軽く頭を下げた。

「初めまして、橘和美と申します。これから、よろしくお願ひします」

歳は十八ぐらいだろうか。ふくよかで、優しそうな表情をしていた。

「えっと……お名前は……？」

和美が何か言いたそうにしながら名前を聞いてきた。

「そういえばあなたの名前を聞いた覚えがないな」

大樹の言う通り、名乗った覚えが無い。

ありきたりな姓に、至って普通の名。市役所でも問題なく通ったのであろう名前を名乗った。その他に、元理髪店経営者であることなどを合わせて自己紹介を行った。

続いて、蘇命さんが立ち上がった。

「私はさつき名乗ったからいいね。前は医者をしてた。今は生き残るためにいろいろしている」
やや自嘲気味に言っていた。

「それじゃあ、食べようか」

蘇命さんの一声で、全員が手を合わせた。

「いただきます」

日が傾き、うす暗くなったこの場所がどこか温かく、明るく感じられた。とても、懐かしく感じられた。まともな食事が久しぶりだからであろうか。この挨拶自体が久しぶりだからであろうか。それとも……。

挨拶が終わると、和美は並べられた料理を指した。

「どうぞ、食べてください。今日の料理は、私と大樹が作りました。大樹の方が料理は上手ですけど……」

声が徐々に萎んでいった。

とりあえずフォークを持ち、山菜サラダに手をつけた。口に入れると、少しツンとくる酸っぱいに近い風味と、生魚とは異なる水っぽい生臭さが広がった。

十年前なら吐き出して文句を言っていたであろう。今はフォークが勝手に進む。

「うまい」

心の底からの言葉であった。

スープは匂いか味が判別できないほど薄い。

「こんな時代だ。何食べてもうまいだろ」

大樹は嬉しそうな表情で言った。和美も少しだが、笑顔を見せた。

非常に、おいしい。それ以上に、温かい。

食後、食器などを片付けた。その後、全員で頭にアンテナを付けた電子レンジ程の黒い機械をテントに運び込んだ。蘇命さん曰く、無線機らしい。

僕と大樹と和美でペダルの付いた発電機なる物を片付けることとなった。テントの横にドラム缶程の白いタンクが置かれていた。タンクの上には一畳程の大きさのソーラーパネルが置かれていた。

「これ、何のために」

「蘇命さんの趣味みたいなものだ。あの人はサバイバルマニアだから」

「万能ナイフは医者やってた頃から持ち歩いていたらしい」

「恐ろしいな……」

「無人島生活とか憧れてたらしい」

「蘇命さんとはどれぐらい一緒に行動しているんだ？」

僕の問いに大樹が答えた。

「だいたい五年ぐらい前からかな。一人でどうしたらいいかわからなかった所を拾われた」

「私は長い冬が始まってすぐかな。地下に逃げ込んだから無事だったんだけど、強盗にダイナマイトで破られて……」

「モグラ掘りか……」

八年前であつたか、世界がこのような有り様になった原因の事件。その時地下シェルターに入れたのは限られた人間だけであつた。金持ちと権力者は自家用シェルターを持つていた為、その大半が難を逃れた。一方で地上に残されたものの、生き残つた者達は、長い冬の寒さにさらされた。この理不尽に対する憎悪と憤怒が地下へと向けられた。彼らは地下の者を「モグラ」と呼び、蔑んだ。地面を掘り、ダイナマイトでシェルターの天井を破壊した。中の物は全て奪い、中の者は引きずり出された。

和美は言葉を詰まらせていた。手が少し震えている。

「それで俺とサクラ先生が助けた。まあ、俺は特に何もしてないけど」

「……」

何も言えない。僕も地上で長い冬を越えた人間だ。時に地下へ逃げた人間を羨ましく思い、自分たちだけ逃げたと妬ましく思った。しかし、生きていくためには強奪というのもやむを得ないのかもしれない。そう思ってしまう心がある。

それ故に、酷い奴らだ、などと言う事は出来ない。

「ごめん、こんなこと聞いて……」

「気にするな。これから一緒に生活する仲間なんだから、必ず通る道だ」
ひとまず、僕はこの集団に仲間入りすることとなった。

僕が蘇命さん達と出会ってから一ヶ月が経つた。

温かい陽気の下、心地よい風が吹くようになった。窓から見える河原には、草が生い茂り、木も緑をつけていた。その向こうには山も見える。

「この部屋、いい眺めですね」

建物の一室から外を覗いていた。窓には綺麗なままのガラスがはめられていた。

部屋の中には、木製の机と椅子が並んでいた。黒板が見当たらないが、かつては教室であつたのであろう。

蘇命さんは机と椅子を外に運び出しながら声を掛けてきた。

「外を見るのはベッドを運び込んでからにしてよ」

現在、僕は引越し作業中である。

数か月前まで、彼女達は倉庫のような建物にいた。しかし、壁が腐って倒壊しそうになったため、あのテントを仮の住処としたという。しかし、雨風がしのげる屋根が欲しかったため、建物を探していたようだ。その途中で僕と出会つたようだ。

「わかっています。それよりも、そんなにベッド持つてきて何するつもりですか？」

廊下では、既に運び出された机と持ち込まれたベッドが渋滞した車の様になっていた。ベッドの数は四つを明らかに越えている。

蘇命さんと共に運び込んだ大樹も疑問に思つたであろう。

「ちよっと病室みたいにしたくて」

彼女は悪戯っぽい笑みを浮かべながら、廊下の机を積み上げていった。

ベッドを動かせるだけのスペースを作ると、その手を休めた。

「病院やってた頃を思い出して……。それに、新しい生き残りを見つけて人が増えるかもしれないし……」

表情がわずかに暗くなった。

「まあ、それはありますね」

当然、減る可能性の方が高いのだが、そのことについてはお互いに言わない。

「そろそろ、お昼ごはんですね」

「じゃあいつもの畏見てきて」

「わかりました」

教室を出で、廊下を歩いていると、廊下が途中で途切れていた。それはそのまま、外へと繋がっていた。

外へ出て振り返ると、学校の校舎のような細長い建物があった。僕達が新しく住処にしようとしている建物である。その端の方は壁が無くなったのか、中の廊下が見えていた。

少し歩いた所にバケツがひっくり返っていた。そこからは叩くような音がして、バケツが小さな動きを何度も繰り返していた。

それと共に、鳥のような鳴き声が聞こえた。それも、複数である。

「本当に引っかけた」

蘇命さんの言う通りに作った、鳥を捕えるための罠だ。

初めて獲物を捕えた気分になりながら、昼食と夕食のメニューに想いを馳せた。

*

夕食が終わって日が傾いてきた頃、大樹、和美、僕の順番で八畳ほどの部屋に呼び出された。引き戸を開けると、蘇命さんが首から聴診器を掛けて座っていた。

部屋の奥には机があり、棚には黄ばんだ医学の本や救急箱、薬などが並んでいた。背もたれのついたキヤスター付きの椅子が一つ、その向かいに丸椅子があった。ベッドも置かれ、診察室の様だった。

恐らくは、保健室だったのであろう

「座って」

僕が部屋に入ると、蘇命さんに促された。

丸椅子に座ると、丁度目に差しこんでくる西日が当たり、眩しかった。

「症状は出てない？」

僕の胸に聴診器を当てながら尋ねてきた。

「風邪もないですし、痙攣もないです」

「まあ、この様子だと狂犬病はないかな。じゃあ、次背中」

背中を見せると、後ろから聴診器が当てられた。

「そもそも死亡率百パーセントの病気の疑いがあったら普通は隔離するでしょう」

「まあ可能性も低かったし、人から人へは移らないから」

「はい、オッケー」

「ありがとうございました」

僕が一礼して出ようとした時、彼女に呼び止められた。

「ねえ、髪もずいぶん伸びたから切ってくれない？」

そう言いながら、振り返ってみせた。髪は背中に着きそうなまでに伸び、ボサボサで、黒い髪も光の反射で茶色く見えた。先の方はツヤもなく、古くなった輪ゴムの様になっていた。かなり痛んでいる。ケアをしていないのだから当然である。

「わかりました。どこか部屋でしましょう」

隣の部屋も八畳ほどで、ベッドが三つ置かれていた。そのベッドを端に寄せ、部屋の中央に椅子を置いた。

「どんな感じにしましょうか？」

「ちよっと短めにして」

そう言うと、彼女は椅子に座った。すこし微笑んでいるのが見えた。少しでも綺麗になるのが楽しみなのである。

水をつけた手で髪を軽く濡らし、鋏を入れた。切れる音と共に、痛んだ髪の束が床に落ちていった。

鋏を入れながら、尋ねてみた。

「蘇命さんは、何か目的や目標ってあるんですか？」

「あるよ」

「何ですか？」

「今は、傷ついた人、特に子ども達を集めて病院がしたいなって思う。あとは生き残った人に少しでも立ち向かう希望を持ってもらえるようにしたい」

その蘇命さんの声に、力強さと希望を持っているのだな、と感じた。

「希望ですか……」

大きく鋏を動かして、長さを短くしていった。

「それで、村なり集落を作ってちゃんと生活する所を作りたい」

「人類再興ですか？」

「何か違う気はするけどね……」

苦笑いのような笑い声で会話が途切れた。

数秒の間、鋏の音だけが部屋に響いていた。それから先に口を開いたのは蘇命さんだった。

「その呼び方も堅苦しいから呼び捨てでいいよ。歳もそんなに離れてないし」

「蘇命……」

照れのせいかわ、堂々とは呼べなかった。鋏を持つ手も止まっていた。呼び捨てには抵抗があるようだ。

「じゃあ大樹達みたいにサクラ先生って呼びます」

櫛で髪の毛を少し上げてから、中の方へ鋏を入れた。

「まあそれでもいいけど……」

サクラ先生は呟くように答えた。

髪がよく見えない、と思ったら日がもう落ちかかっていた。暗くなった時の為に用意していたランタンに火を灯し、温かい光が部屋の中を照らした。

部屋が明るくなり、再び鋏を動かし始めた。

僕は無力であった。サクラ先生を思い出すたびに、胸が締め付けられる。時が僕の心を突き刺し、抉り、削り去っていくようだった。

瓦礫を踏む音が、まるでその効果音の様にすら思えた。

瓦礫の荒野を踏みならしていると、何か弾ける音が聞こえた。太鼓の音のように、何度も何度も音が響いてくる音だった。

それと同時に人の叫び声も湧き上がった。興奮気味の声、悲鳴のようなものが入り混ざっていた。

何も考えず、呆然と音の方向へと向かった。

乱雑に台車が置かれていた。ボロボロの段ボール箱が乗せられ、その中にはダイナマイトが詰まっていた。

その二十メートルほど先では、十数人の人が、地面に開けられた直径一メートル程の穴の周囲を取り囲んでいた。穴の近くにはダイナマイトが置かれていた。

導火線に火が着き、ダイナマイトへと近づいていった。

粉塵が空に舞い、青い空を黄色く染めていった。あの長い冬のように。

「よし、引きずり出すぞ！」

一人の男が叫ぶと、広げられた穴の中に周りの者達も入っていった。

程なくして、五歳ほどの女の子が引きずり出された。まるでバーゲン品の様な扱いである。赤いワンピースを着ていた。

「皆木征司を見つけたぞ！」

とても久しぶりに聞く名であった。仕事中にテレビやラジオでよく聞いた名だ。かつて、この国の大臣を務めた人物だったはずだ。

「避難もさせずに自分たちだけシェルターに逃げやがって！」

「引きずり出せ！」

暴力の雨にさらされながら、皆木征司は引きずり出されてきた。顔は既に血まみれで、テレビで見たあの政治家と同一人物か判別も付かない。

赤いワンピースの女の子が足を引きずりながら、こちらへゆっくりと向かってきた。その赤は何の赤かわからないほどボロボロになっていた。

「お兄さん、ここどこ？ パパはどこにいるの？」

中にいる間、何も知らされていないなかったのである。困惑しているようであった。

それでいながら、まるで春を思わせるような澄んだ瞳をしていた。雲一つない、青い空のように。サクラ先生を思い出させる。

空を見上げると、空が少し黄色く濁っていた。振動と共に、それは濃くなっていき、空を覆ってしまうのではないか、とさえ思える程であった。あの暗い冬が再び訪れたかのような錯覚に襲われた。

見下ろせば、モグラ掘りが終わり、モグラ叩きが始まっていた。出てきた物資を仲間で取り合う様子も見えた。

ああ、汚い。

それが、この光景に対する感想だった。青さを失いつつある空に対してか、その下の様子に対

してかはわからない。ただ、この子の目にこのようなものを映したくない。
折った。導火線の付いた筒の束を握って。
せめて、この子の視界を綺麗にしてほしい。
彼女の顔を手で覆った。

*

小中学校の校舎を思わせる細長い建物の一室にベッドが六つ。ベッドを二つ追加した。サクラ先生が作った病院である。独りでいた子どもを集めたら、ベッドが足りなくなったせいだ。

僕は何も理解できていない彼らをこの即席病院に入院させた。

窓は白い布で覆い、外が見えないようになっていた。廊下も同じようにして窓を覆い、廊下の崩落部分はテントに使っていた布で覆った。

先生は大樹や和美に全てを教え、強く生きる術を与えようとした。僕にはできそうにもない。

僕は何も知らないことを幸せとし、全てを隠し、騙すことを選んだ。ベッドから動かないことで、彼らは更に弱っていくであろう。

大樹も和美も反対したが、彼らの希望を奪いたくなかった。

僕は僕のやり方で彼らを守ろうと思った。